

感覚様相の違いが記憶の想起に伴う感情に与える影響についての検討

池田, 恭子
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/26132>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 14, pp.33-40, 2013-03-01. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン :
権利関係 :

感覚様相の違いが記憶の想起に伴う感情に与える影響についての検討

池田 恭子 九州大学大学院人間環境学府

Examination of influence that difference of sensory modalities gives to feelings according to recollection of memory
Kyoko Ikeda (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

The purpose of the present study is to find the materials for the setting of the theme that draws out the important element "nostalgia" in a reminiscence therapy to investigate Proust phenomenon experience and a similar experience. Subjects were 240 college students. Subjects were fulfilled to the questionnaire about the memory of nostalgia. The results were the followings. It was no difference in the feelings according to the memory recollected by stimulation of sense of smell, sight, and aural, and in the degree of nostalgia by the difference of sensory modalities. But it was the difference was seen by the difference of the feelings experience to the memory. When the nonverbal stimulation is used in a reminiscence therapy with paying attention to the quality of the recollection memory, and to set the theme that utilizes the feature of each stimulation, because it was suggested that there be a qualitative difference in the content of the recollection memory by the difference of sensory modalities.

Key Words: sensory modalities, nostalgia, the recollections of the memory

I 問題と目的

1. 回想となつかしさについて

過去のさまざまな出来事が自然に、あるいは意識的に想起される心的過程のことを回想という。回想は“Eriksonの心理社会的発達段階理論における老年期の発達課題「自我の統合」を達成する方法の1つとされ、Butlerは高齢者の回想に積極的な意味を見出し、高齢者を対象とする心理療法として回想法を提唱しており、これまでに高齢者が過去を回想することにより心理的適応が高まる可能性が指摘されている”(黒川, 2005)という。大和(1989)は回想を行うことが情緒や精神的機能を再喚起し、自己概念の維持や不安軽減等をもたらすのではないかと考察しており、長田ら(1994)はこのような高齢者の記憶の回想は情動を伴うことが多く、“なつかしさ”を感じることを報告している。

“なつかしさ”は過去の物や行為に対する好意的な感情といわれており(小林ら, 2002)。想起した内容を“なつかしい”と感じたときには、気分がポジティブであり、内容に対してはポジティブな評価をする(多田, 1998)という。だが、なつかしいという感情にはポジティブなものだけでなく、感傷性を伴う感じ、ほっとする感じ等と広い意味合いが伴うと考えられるため、“なつかしさ”とは森田(2008)が指摘するように記憶想起に伴う様々な情動性を包括した語だと考えられるが、その点について実証した研究は行われていない。

2. 想起刺激としてののにおいと想起される記憶

回想を用いた心理療法である回想法を行うにあたり、話のきっかけとしてテーマを提示することがあり、テーマを言語的刺激で提示することもあるが、非言語的刺激で提示することもある。有園ら(1998)は、回想法施行時に、におい刺激が回想内容の質と量に与える影響を検討した結果、実際においを用いた場合には、用いなかった場合に比べて過去の体験に対する否定的感情が減り、同時に現在の対人関係上良好な接触が引き出されたと報告している。しかし、嗅覚や視覚、聴覚などの感覚への非言語刺激の選定についての調査はほとんど行われていない。野村(1998)によると、回想法のテーマに関して検討し、理論化を行っている論者は極めて少ないという。

回想法においを用いることで現れた結果としては以上のようなものがあるが、においを刺激として想起される記憶についてはブルスト(Proust)現象に関する調査がある。におい手がかりによって、過去の記憶が呼び起こされる現象は作家ブルストの作品のなかで登場人物が紅茶に浸したマドレーヌのにおいによって、忘れていた幼少期の記憶を鮮明に思い出したことに由来してブルスト現象と呼ばれている(山本, 2008)。

この現象は主に実験心理学者により研究が行われてきた。実験室で実験協力者に実際においをおいでもらうことで想起された記憶について、他の感覚様相(一般に視覚、聴覚、嗅覚等の感覚入力の様式、および言語の発話、空間的操作等の出力の様式)への刺激によって想起された記憶と比較されてきた。その結果、“おいから

想起された記憶は詳細な情報を含み、また古く減多に思い出されないのであり、記憶を想起する際に強い情動性と当時に連れ戻されるような感覚を伴うことが考察されており、解剖学的には、想起時に扁桃体の活動を活性化することが明らかになっている”（森田，2008）とされている。だが、森田は実験室での実験的手法では「日常的体験」としてのブルースト現象の説明には不十分と指摘し、ブルースト現象において特にエッセンスとなる「においを嗅いだ瞬間における情動性」と「その体験の偶発性／不意さ」に着目して、ブルースト現象の体験の特徴について質問紙による調査を行った。その結果、ブルースト現象では快記憶が想起されることが多いと想定され、体験時には“なつかしい”という感情が最も共有性をもっているとしている。

しかし、森田の研究では想起に伴う感情の強さや、他の感覚様相への刺激によって想起される記憶については述べられていない。過去の出来事が鮮明に想起される現象はにおいによって特異的に引き起こされるのではなく、写真や録音された声などでも生じる（綾部・菊地，1996）というが、日常的体験の中で嗅覚・視覚・聴覚の三つの感覚様相について比較を行った研究やなつかしさに着目した研究は行われていない。

実際に他の感覚様相についてもブルースト現象の体験と同様の体験があると考えられ、感覚様相の差によってその体験において差があるのか、もしあるとすればどのような差があるのかということ調査することにより、回想法における重要な“なつかしさ”という要素を引き出すテーマの設定のための資料として役立つことができると考えられる。

3. 目的

以上のことをふまえて本研究では次の目的のもと調査を行う。①感覚刺激によって日常生活の中で想起された記憶の特徴、想起刺激の特徴を各感覚様相ごとに整理・分類し把握する。次に②感覚様相の違いによって記憶の想起に伴う感情体験、感情の強さについてどのような違いがあるのか、回想法において重要とされる“なつかしさ”を感じる度合いについても違いがあるのか検討する。

II 方法

1. 調査時期

2009年10月下旬から12月上旬。

2. 調査対象

筆者の質問紙調査の依頼を承諾した大学教員の授業を受講している大学生、あるいは大学院生に質問紙を配布

した。回答率は61%であった。

3. 質問紙構成

無記名で行い、年齢と性別のみを記入してもらい、教示文に続いて嗅覚から想起される記憶、視覚から想起される記憶、聴覚から想起される記憶という3種類の記憶について次の各項目に回答を求めた。

- (1) 記憶の有無
- (2) 想起された記憶の内容
- (3) 記憶の想起に伴う感情について

(①記憶を想起した当時の感情／②記憶を想起した当時の感情の強さ／③記憶のなつかしさ／④現在の感情／⑤現在の感情の強さ)

教示文・質問項目については森田（2008）の質問紙を参考とした。教示文は、嗅覚による想起記憶については「紅茶に浸したマドレーヌのにおいから、昔幼いころにマドレーヌを食べたときのことを思い出すというように」、視覚による想起記憶については「テレビに映っていた光景を見たことで、以前にその光景を見たときのことを思い出すように」、聴覚による想起記憶では「テレビなどから聞こえてきた音を聞いて、その音を以前聞いた時のことを思い出すように」と教示してから嗅覚・視覚・聴覚によって想起される記憶について尋ねた。回答方法については(1)は「ある」・「ない」の選択を求め、「ある」を選択した場合には(2)以降の質問への回答を求め、「ない」と選択した場合には次の感覚刺激による記憶想起についての質問に進むように求めた。(2)は自由記述での回答を求め、(3)の①と④についてはRussell & Carrollの研究をもとに榊（2007）が作成した感情尺度を参考に作成し「嬉しい」「悲しい」など13個の感情を表す選択肢を自由に選択してもらい、選択肢のうち「その他」を選んだ場合に空欄に感情を表す言葉を記入してもらうよう求めた。(3)の②と⑤については、記憶特性質問紙（Takahashi & Shimizu, 2007）を参考に作成した。(3)の③については森田（2008）の質問紙を参考とした。

記憶を想起した当時と現在の感情の強さについては1（とても強かった）—5（とても弱かった）、記憶のなつかしさを感じる度合いについては1（とてもなつかしい）—5（全くなつかしくない）、というようにそれぞれ5件法で回答を求めた。これらの項目は分析の際には選択肢1に5点、2に4点、3に3点、4に2点、5に1点を与えた。

III 第1研究

1. 目的

日常生活の中で、嗅覚・視覚・聴覚への刺激によって

想起される記憶について、感覚様相の違いによって想起される内容の特徴に違いがあるのか、またどのような想起刺激が存在するのかを調査する。

2. 方法

分析対象者は調査に回答した大学生および大学院生計240名（男性113名、女性127名）で、平均年齢は19.9歳（ $SD=1.8$ ）であった。

3. 結果

1) 想起する記憶の有無の比較

感覚様相の違いによって記憶の想起の有無に差が出るのか比較した。記憶の想起の体験人数についてはTable 1のとおり。

記憶の想起体験がある人となない人の人数について χ^2 検定を行ったところ、嗅覚刺激による想起体験において有意な偏りが見られた（ $\chi^2_{(1)} = 19.3, p < .01$ ）。視覚刺激による記憶の想起体験において偏りはなく（ $\chi^2_{(1)} = 0.6,$

Table 1

各感覚様相への刺激によって想起される記憶の有無(人)

感覚様相 記憶の有無	嗅覚		視覚		聴覚	
	ある	ない	ある	ない	ある	ない
男	60	53	52	61	45	68
女	94	33	74	53	60	67
人数	154	86	126	114	105	135

ns), 聴覚刺激による記憶の想起体験において偏りは有意傾向であった（ $\chi^2_{(1)} = 3.8, p < .10$ ）。

2) 想起された内容についての分類

質問紙の(2)の自由記述の回答を「どのような記憶を想起したか」という観点から、KJ法を用いて大学院生5名と筆者が分類した。誤字脱字のある場合も、協議の上記述の内容・意味が理解できたものは分類し、そうでないものは分類不能とした。回答が2つ以上のカテゴリに重複するものは協議した上で、最も当てはまると考えられる1つのカテゴリに分類した。分類可能となったのは嗅覚刺激による想起記憶では145名、視覚刺激による想起記憶では119名、聴覚刺激による想起記憶では100名のデータであった。分類結果をTable 2に示す。

各感覚様相ごとに想起した記憶の特性を比較するために、嗅覚刺激、聴覚刺激、視覚刺激3つの刺激全てにおいて記憶の想起がなされたカテゴリである「Ⅰ. 場を想起した記憶」(以下「Ⅰ. 場」), 「Ⅱ. 人・生物を想起した記憶」(以下「Ⅱ. 人・生物」), 「Ⅲ. ある一定の時を想起した記憶」(以下「Ⅲ. 時」)においてそれぞれの人数の偏りを調べるため χ^2 検定を行った。

嗅覚刺激による想起記憶では、3つのカテゴリについて、人数の偏りの差はなかった。視覚刺激による想起記憶については、人数の偏りが見られ（ $\chi^2_{(2)} = 41.21, p < .01$ ）, 「Ⅰ. 場」の人数は「Ⅱ. 人・生物」の人数よりも（ $p < .01$ ）, 「Ⅲ. 時」の人数は「Ⅰ. 場」, 「Ⅱ. 人・

Table 2

各感覚様相への刺激によって想起される記憶の分類

	嗅覚	視覚	聴覚
Ⅰ. 場を想起した記憶	33 (22.8%)	30 (25.2%)	8 (8.0%)
1) 家族に関係する場	24	9	
2) その他の場所	9	21	8
Ⅱ. 人・生物を想起した記憶	37 (25.5%)	13 (10.9%)	10 (10.0%)
1) 家族	15	6	1
2) 恋人	15	1	
3) 友人	5	4	5
4) その他	2	3	4
Ⅲ. ある一定の時を想起した記憶	55 (37.9%)	68 (57.1%)	73 (73.0%)
1) 特定の年代	37	46	36
2) できごと	18	22	37
Ⅳ. ものにまつわる記憶	11 (7.6%)		9 (9.0%)
1) 食べ物	9		
2) 化学薬品	2		
3) ドラマ・テレビ			8
4) 本			1
Ⅴ. 風景・自然	8 (5.5%)		
Ⅵ. 漠然・曖昧なもの	1 (0.7%)	8 (6.7%)	

数値は人数。〈 〉は単一の感覚様相内のデータの中で占める割合

生物」の人数よりも ($p < .01$) 多かった。聴覚刺激による想起記憶においても、人数の偏りが見られ ($\chi^2_{(2)} = 90.09, p < .01$)、「Ⅰ. 場」の人数と「Ⅱ. 人・生物」の人数間に有意差はなく (ns)、「Ⅲ. 時」の人数は「Ⅰ. 場」、「Ⅱ. 人・生物」の人数よりも多かった ($p < .01$)。結果を Fig.1 に示す。

3) 想起の刺激の分類

質問紙の (2) の自由記述の回答を「どのような刺激が想起のきっかけとなったか」という観点から、KJ法を用いて大学院生5名と筆者が分類した。なお、分類可能となったのは嗅覚刺激について144名、視覚刺激について121名、聴覚刺激について103名のデータであった。分類結果を Table 3 に示す。

4. 考察

記憶を想起した体験の有無については、嗅覚への刺激による想起体験において体験がある人が、聴覚への刺激による想起体験においては無い人のほうが多い傾向が見られた。森田 (2008) の研究では、ブルースト体験の有無についてであると回答した人が多いという結果であり、今回の研究でも嗅覚刺激による想起体験については先行研究どおりとなった。さらに結果から嗅覚刺激による記憶の想起体験が視覚・聴覚刺激による記憶の想起に比べて広汎性があることが示唆された。

想起記憶の内容に関しては、「Ⅰ. 場」、「Ⅱ. 人・生物」、「Ⅲ. 時」の3つのカテゴリにおいて、視覚刺激・聴覚刺激による想起記憶ではカテゴリ間の人数の偏りが見られた。特に、視覚や聴覚刺激による想起記憶では「Ⅲ. 時」の人数が多く「Ⅱ. 人・生物」の人数は少なかった。このことを感覚様相への想起刺激として独特に

挙げられたものと関連づけて考えるならば、視覚刺激独特の想起刺激として挙げられたものはテレビや写真などであったが、テレビや写真を見て「その人が誰か」ということを想起するのではなく、「その人と何をしたか」「その人とどこに行ったか」ということが想起されやすくなるために得られた結果ではないかと考えられる。そのため人の想起よりも場やある一定の時の想起が多くなったのではないだろうか。また、聴覚刺激独特の想起刺激としては音楽が多く挙げられ、音楽は何度も繰り返し聴くことが多いと考えられるため「その音楽を聴いていた頃」というある一定の時の想起が起きやすくなるのではないかと推測される。

これらと比較し、嗅覚刺激による記憶の想起ではカテゴリ間の人数が偏らず、視覚・聴覚への刺激による想起と比較して年代や場、人といった多様な想起がされやすいと考察される。これは想起刺激としてにおい独特の刺激に挙げられたものが、香水や整髪料という人の使用するものや季節や空気といった場に関するもの、線香のようにある空間(場)に漂っているものなどであったため、他の感覚様相への刺激によって想起された記憶よりも人や場の想起の比率が大きくなったのではないかと考えられる。

このように、各感覚様相において以上のような想起される記憶の質の違いが見られたが、中には想起刺激が異なっても想起される記憶に同じようなものが見られた。例えば、「部活」に関する記憶を想起したという回答では想起刺激として「部室におい」という嗅覚刺激や「昔使っていたシューズ」という視覚刺激、「吹奏楽部の演奏」という聴覚刺激が挙げられている。このように3つの感覚様相に類似した想起記憶が見られたことから、一つの感覚様相だけが記憶と結びついているのでは

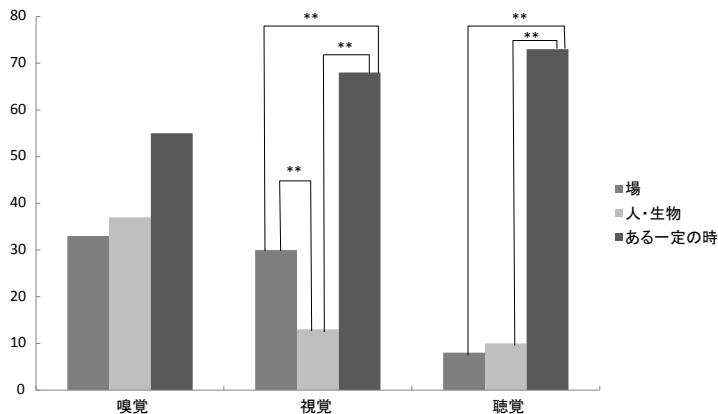


Fig.1 各感覚様相における場、人・生物、ある一定の時を想起した記憶の人数
** $p < .01$

Table 3
各感覚様相への想起刺激の分類

	嗅覚	視覚	聴覚
I. 場所	10 (6.9%)	15 (12.4%)	
II. 自然	16 (11.1%)	12 (9.9%)	12 (10.9%)
III. もの	6 (4.2%)	10 (8.3%)	
IV. 建物	6 (4.2%)	9 (7.4%)	
V. 人	4 (2.8%)	9 (7.4%)	2 (1.8%)
VI. 植物	20 (13.9%)	5 (4.1%)	
VII. 衣服	3 (2.1%)	2 (1.7%)	
VIII. 食べ物	27 (18.8%)	2 (1.7%)	
IX. 動物	2 (1.4%)	1 (0.8%)	
X. におい独特の刺激	50 (34.7%)		
1) 香水	20		
2) 消毒品・化学物質	12		
3) 季節・空気	8		
4) 線香	5		
5) 整髪料	3		
6) 腐敗	2		
XI. 視覚独特の刺激		56 (46.3%)	
1) テレビ		24	
2) 写真		23	
3) デジャヴ		7	
4) 文字		2	
XII. 聴覚独特の刺激			96 (87.3%)
1) 音楽			80
2) 機械音			8
3) 楽器			3
4) その他の音			5

数値は人数。〈 〉は単一の感覚様相内のデータの中で占める割合

なく、さまざまな感覚様相と記憶が結びついているということが示唆され、個人によって最も結びついていると感じる感覚様相は異なることが考えられる。

IV 第2研究

1. 目的

感覚様相の違いによって記憶の想起に伴う感情体験、感情の強さ、なつかしさを感じる度合いについて違いが見られるのか比較する。

2. 方法

研究1と同様に調査で得られた分析対象240名のうちに次のような特徴が見られた。それは、記載した想起体験が全てネガティブな者あるいはポジティブな者が確認されたこと、また個人の回答数が違うこと（ある者は1つの感覚刺激による想起だけ答え、ある者は3つの感覚刺激による想起だけ答えるということ）であった。その

ため、個人の記憶の想起の傾向や研究1で得られた結果である「体験の広汎性の差」が影響しないように240名をランダムに80名ずつの3群に分けた。それぞれ嗅覚刺激による想起を記載した群（以下嗅覚群）、視覚刺激による想起を記載した群（以下視覚群）、聴覚刺激による想起を記載した群（以下聴覚群）として、各グループから想起体験があると回答した者のデータを選出し分析した。嗅覚群からは55名、視覚群からは47名、聴覚群からは45名のデータを用いた。

3. 結果

1) 感情群について

質問紙の(3)の①と⑤に対する回答で、13項目の回答項目のうち、榊(2007)の分析を参考にして「嬉しい」などポジティブな感情を表す言葉のみを選択した回答者は「ポジティブ群」、 「悲しい」などのネガティブな感情を表す言葉のみを選択した回答者は「ネガティブ群」、 ポジティブな感情、ネガティブな感情を表す言葉ともに

少なくとも一つずつ以上選択した回答者は「複合群」と命名した。回答者が13項目のうち「その他」の項目のみを選択している場合は、「その他群」とし、その他以外に回答している項目があればその項目を参考にして上記のように群に振り分けた。ただし、「その他群」はさまざまな記述がなされ、統一しがたいため分析は「ポジティブ群」・「ネガティブ群」・「複合群」で行った。このため、当時の感情群または現在の感情群において「その他群」に振り分けられた14名のデータを除外した133名のデータで分析を行った (Table 4, 5)。

2) 感情体験について

記憶を想起した当時の感情体験について、各感覚様相群ごとに記憶を想起した当時の感情群について χ^2 検定を行った。嗅覚群, 視覚群, 聴覚群全てにおいて, ポジティブ群はネガティブ群より (いずれも $p < .01$), 複合群より (いずれも $p < .01$) も人数が多かった。現在の感情体験についても各感覚様相群ごとに現在の感情群について同様に分析したところ, 嗅覚群, 視覚群, 聴覚群全てにおいて, ポジティブ群はネガティブ群より (いずれも $p < .01$), 複合群より (いずれも $p < .01$) も人数が多いという結果が得られた。

よって, どの感覚様相群においても, 記憶を想起した当時か現在かに関わらずポジティブ群の人数がネガティブ群, 複合群の人数よりも多いことが示唆された。

3) 記憶を想起した当時の感情の強さの比較

記憶を想起した当時の感情の強さについて, 感覚様相

Table 4
記憶を想起した当時の感情群

	嗅覚群	視覚群	聴覚群
ポジティブ群	40 (37)	37 (36)	33 (31)
ネガティブ群	3	5	5
複合群	7	4	5
その他群	5	1	2
人数	55 (47)	47 (45)	45 (41)

表中の () 内の人数は実際に分析に使用した人数である

Table 5
現在の感情群

	嗅覚群	視覚群	聴覚群
ポジティブ群	43 (41)	38 (40)	31 (30)
ネガティブ群	5 (3)	5 (4)	5
複合群	3	1	6
その他群	4	3	2
人数	55 (47)	47 (45)	45 (41)

表中の () 内の人数は実際に分析に使用した人数である

群による1要因の分散分析を行った結果, 有意な差は見られなかった ($F_{(2,130)} = .755, ns$)。次に, 記憶を想起した当時の感情の強さについて想起した当時の感情群による1要因の分散分析を行った結果, 有意な差が見られた ($F_{(2,130)} = 3.388, p < .05$)。TukeyのHSD検定による多重比較を行ったところ, ネガティブ群とポジティブ群の間に有意差が見られ ($p < .05$), ネガティブ群のほうがポジティブ群よりも記憶を想起した当時強い感情を感じていた (Fig.2)。

4) 現在の感情の強さの比較

現在の感情の強さについて, 感覚様相群による1要因の分散分析を行った結果, 有意な差は見られず ($F_{(2,130)} = .813, ns$)。現在の感情群による1要因の分散分析を行った場合も有意な差は見られなかった ($F_{(2,130)} = 1.008, ns$)。

5) なつかしきさについて

なつかしきさを感じる度合いについて, 感覚様相群による1要因の分散分析を行った結果, 有意な差は見られなかった ($F_{(2,130)} = .015, ns$)。しかし, 記憶を想起した当時の感情群による1要因の分散分析を行った結果, 有意な差が見られ ($F_{(2,130)} = 6.252, p < .01$)。TukeyのHSD検定による多重比較を行った。ポジティブ群と複合群はネガティブ群と有意差があり ($p < .01$), 2つの群はネガティブ群よりなつかしきさを感じていることが示された (Fig.3)。

同様に現在の感情群による1要因の分散分析を行った結果, 有意な差が見られ ($F_{(2,130)} = 5.659, p < .01$)。ポジティブ群はネガティブ群よりなつかしきさを強く感じているということが示された。また, 複合群はネガティブ群よりなつかしきさを感じる傾向にあることも示された ($p < .10$)。結果を Fig.4 に示す。

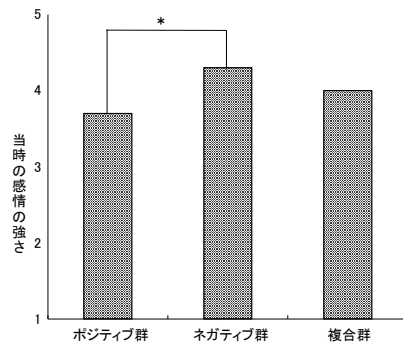


Fig.2 記憶を想起した当時の感情群における記憶を想起した当時の感情の強さ

* $p < .05$

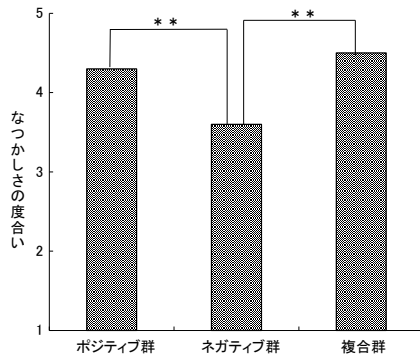


Fig.3 記憶を想起した当時の感情群におけるなつかしさの割合
** $p < .01$

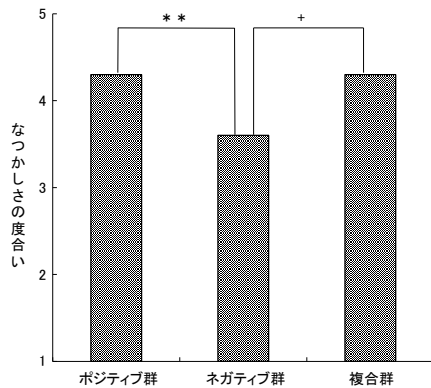


Fig.4 現在の感情群におけるなつかしさの割合
** $p < .01$, + $p < .10$

4. 考察

どの感覚様相群においても、ポジティブ群の人数がネガティブ群と複合群よりも多いということから、快記憶の想起が多いというのにはおきよによって引き起こされる記憶の想起についてだけでなく、他の感覚様相への刺激による記憶の想起についても同様であることが示唆された。感覚様相の差を考慮しない無意図的想起は、意図的に想起した記憶よりも快記憶が多くなるということが報告されている(雨宮・関口, 2006)。そのため、感覚様相の違いによる感情体験の違いは見られなかったと推察される。このことから、どの感覚様相においても無意図的な想起を促すことは快記憶の想起を促しやすい可能性があるといえる。

感覚様相の差による感情の強さの差は記憶を想起した当時・現在に関わらず見られなかった。そこで感情群の差を検討したところ、当時の感情群についてはネガティブ群のほうがポジティブ群よりも強い感情を感じていたことから、記憶の想起時にネガティブな感情を感じてい

るほうがポジティブな感情や複合的な感情を感じている人よりも記憶の想起に伴う感情が強く感じられることが示唆された。現在の感情群では感情の強さについてポジティブ群とネガティブ群では有意差はなく、記憶を想起した時から現在にいたるまでにネガティブな体験と心理的な距離がとれたため、差が見られなくなった可能性がある。有園ら(1998)は回想行為の持つ意味について当初極めて強い情動が付与されて語られていた思い出も繰り返し回想されるにつれて、嫌な感情が客観化され冷却され標準化され、情動は新たに再体制化されるという「情動の冷却化機能」をとりあげているが、その機能が働いていることも考えられる。

またなつかしさを感じる割合についても感覚様相の違いによる差は見られなかったが、記憶を想起した当時の感情群、現在の感情群別に分けると有意差が見られた。このため、感覚様相の違いではなく、感情体験の違いがなつかしさを感じる割合に関係しているということが示唆された。

記憶を想起した当時の感情群においては、ポジティブ群、複合群のほうがネガティブ群よりもなつかしさを感じていた。そして現在の感情群ではポジティブ群のほうがネガティブ群よりもなつかしさを感じており、複合群のほうがネガティブ群よりもなつかしさを感じている傾向がみられた。ポジティブ群がネガティブ群よりもなつかしさを感じているのは、なつかしい思い出がポジティブな感情的印象を持つという多田(1998)の報告と一致するが、ポジティブな感情、ネガティブな感情の両方を含んだ複合群がネガティブ群よりもなつかしさを感じているという結果から、なつかしさを感じる時にはポジティブな感情が大きな要素であるが、しかしそれだけではないことが推察される。すなわち、“なつかしさ”とは森田(2008)が指摘するように記憶想起に伴う様々な情動性を包括した語だといえる。

V 総合考察

1. 本研究のまとめ

今回の研究の結果から、感覚様相の違いによって記憶の想起に伴う感情についての違いは見られないが、感情体験の違いによって感情の強さやなつかしさを感じる割合に違いが見られるということが示唆された。またどの感覚様相においてもポジティブな感情を伴う想起が多いという結果となった。このため、日常体験におけるブルースト体験についての先行研究の結果である快記憶の想起の多さや記憶の想起に強い情動を伴うというのは、おきよという想起刺激の特殊性ではなく、偶発的な想起であるということの影響が強いと考えられる。よって、偶発的な想起を促すことにより快記憶の想起が多くな

り、ポジティブな感情やポジティブな感情を含んだ複合的な感情がそれに伴うことでなつかしさをより強く感じるようになり、情動が活性化することにつながるのではないだろうか。

2. 今後の課題と展望

課題としては、想起した際に伴う情動などは時がたつにつれて、人に語ったりすることによって冷却化されてしまう可能性があることを考慮すると、当時記憶を想起したときに感じた情動を今現在もはっきりと想起し、回答できたかどうかは不明である。また、いつ記憶を想起したかという時間的な距離も影響するであろうし、想起した体験をその個人がどれだけ覚えていられるかということも影響する。また、想起された記憶に伴う感情が12項目で表現しうるものとはいえないと考えられ、「その他」にはさまざまな記述が書かれていたことも考慮すべきであろう。

また、今回の質問では感覚器への刺激によって記憶を想起したことを想起してもらうといういわば二重の想起となってしまうため、記憶を想起した当時の体験についての質問と現在についての質問を混同してしまった人もいたかもしれない。そのことが記憶を想起した当時と現在の感情体験についての結果が似たようなものになってしまうということも可能性として考えられる。

本研究の結果において記憶の想起に伴う感情について感覚様相の違いによる差はみられなかったが、想起された記憶の内容には質的な差があるということが推察された。このため、回想法場面において非言語刺激を用いる際には感覚様相の違いによる記憶の想起の質に着目した上で、その想起刺激が何かということだけではなく、その想起刺激による想起記憶にどのような感情が結びついているのか、それはなぜなのかということ丁寧を聞いていく必要がある。なぜなら、今回の調査により感覚様相の違いではなく、個人の感情体験の違いが記憶の想起に伴う感情に関係することが示唆されたからである。また本研究で得られた結果を考えると、ネガティブな記憶の想起に強い気持ちが伴うように感じられるという点から回想法において嫌な体験が語られた際に注意をする必要があることが推察された。

今回の調査対象は大学生であり、今後人生の中で大きな変化を迎えていく年代である。結婚、出産、親しい人や親との死別などが今後影響を与えていく可能性も高く、幅広い世代を対象として調査すればまた結果は異なるかもしれない。

謝辞

ご指導いただきました九州大学大学院人間環境学府研究院針塚進先生に心より御礼申し上げます。本研究実施においてご協力頂きました皆様、先生方に感謝いたします。

引用文献

- 両宮有里・関口貴裕 (2006). 無意図的に想起された自伝的記憶の感情価に関する実験的検討. *心理学研究*, *77*(4), 351-359.
- 有園博子・佐藤親次・森田展彰・松崎一葉・小田晋・牧豊 (1998). 高齢者に対するニオイを用いた回想療法の試み. *臨床精神医学*, *27*(1), 63-75.
- 綾部早穂・菊地正 (1996). ニオイの記憶に関する心理学的研究の動向. *筑波大学心理学研究*, *18*, 1-8.
- 小林麻美・岩永誠・生和秀敏 (2002). 音楽の「懐かしさ」と感情反応・自伝的記憶の想起との関連. *広島大学総合科学部紀要*, *28*, 21-28.
- 黒川由紀子 (2005). 回想法－高齢者の心理療法. 誠信書房.
- 森田健一 (2008). 主観的体験から捉えたブルースト現象. *日本味と匂学会誌*, *15*(1), 53-60.
- 野村豊子 (1998). 回想法とライフレビュー その理論と技法. 中央法規出版株式会社.
- 大和三重 (1989). 欧米における回想研究の史的展開－機能分類の試み－. *社会老年学*, *29*, 51-63.
- 長田由紀子・長田久雄 (1994). 高齢者の回想と適応に関する研究. *発達心理学研究*, *5*(1), 1-10.
- 榊美知子 (2007). 自伝的記憶の感情情報はどのように保持されているのか－領域構造の観点から－. *教育心理学研究*, *55*, 184-196.
- 多田美香里 (1998). 「懐かしい」思い出に関する偶発的想起経験の事例研究. *感情心理学研究*, *6*, 43-44.
- Takahashi, M., Shimizu, H. (2007). Do you remember the day of your graduation ceremony from junior high school? : A factor structure of the memory characteristics questionnaire. *Japanese Psychological Research*, *49*(4), 275-281.
- 谷川原千恵美・渡辺久美子・佐藤親次・斉藤幸子・綾部早穂・松崎一葉・小田晋 (1994). ニオイによる高齢者の“なつかしさ”の喚起. *人間工学*, *30*(1), 51-56.
- 山本晃輔 (2008). におい手がかりが自伝的記憶検索過程に及ぼす影響. *心理学研究*, *79*(2), 159-165.